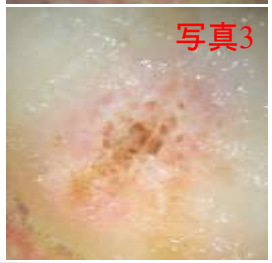
モモの吸蛾類に対する各種薬剤の忌避効果

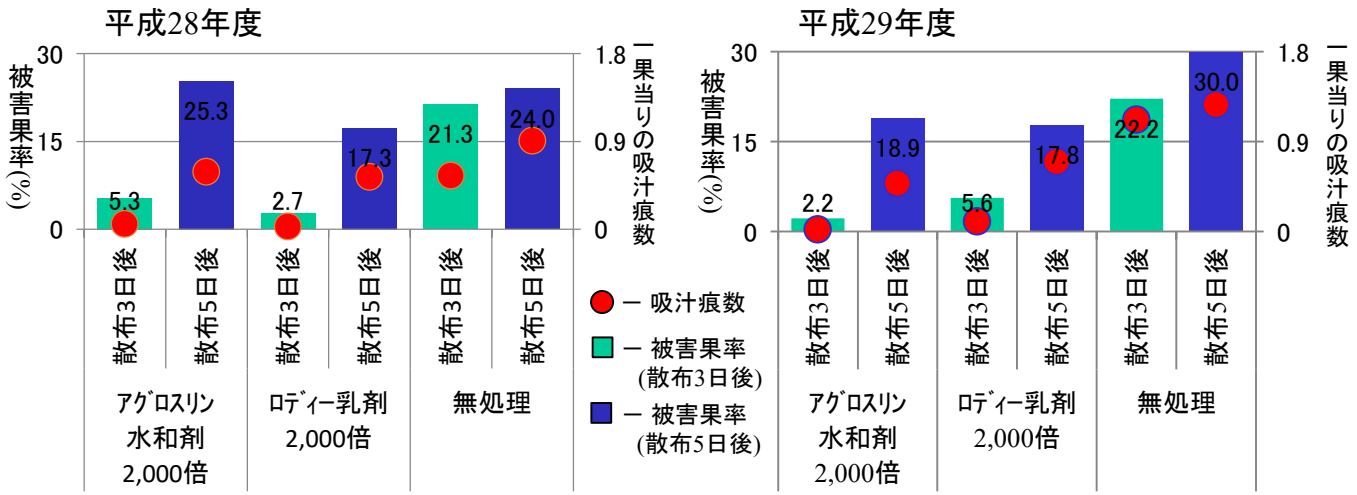
吸蛾類は、成熟期のモモやナシ、ブドウなどの果実を加害するヤガの仲間である。主な種類は、①アカエグリバ②ヒメエグリバ③アケビコノハである。吸蛾類に対する防除薬剤はないが、合成ピレスロイド系殺虫剤の忌避効果が高いことが知られている。ここでは、2種の合成ピレスロイド系殺虫剤の忌避効果について試験結果を紹介する。

被害の特徴

吸蛾類（写真1）は、口吻を果実に突き刺し、吸汁加害する。加害されたモモの果実は、円形の小さな穴が開き（写真2）、その直下は、スポンジ状となる（写真3）。加害後は、加害痕から腐敗する。



薬剤の忌避効果



注）各区の調査果数は、H28: n=75; H29: n=90　H28の調査日: 散布3日後（7/9）、散布5日後（7/11）、H29の調査日: 散布3日後（7/11）、散布5日後（7/16）

合成ピレスロイド系殺虫剤2種の散布は、散布3日後まで被害果率・吸汁痕数が少なく、忌避効果が見られた。散布5日後では、ほとんど忌避されなかった。このことから、アグロスリン水和剤とロディー乳剤は、散布から3日程度の忌避効果がある。

防除のポイント

1. 防蛾灯（黄色蛍光灯）の設置（園内照度を2 lux以上）
2. 防虫ネット（網目:0.5～1cm）で被覆
3. 袋かけを行う

ネットの設置等が困難な場合に、左記の薬剤が短期的であるが有効である。

データ協力・提供：（株）住友化学